

氏 名	阿久澤 弘陽
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 8 4 3 1 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	コントロール現象の統語的・意味的分析 —主文動詞と補文形式の対応関係—
主 査	筑波大学 教 授 Ph.D. (言語学) 竹沢 幸一
副 査	筑波大学 教 授 博士（言語学） 杉本 武
副 査	筑波大学 准教授 Ph.D. (認知科学) 宮本 エジソン 正
副 査	筑波大学 准教授 橋本 修

論 文 の 要 旨

本論文は、日本語のいわゆる補文コントロール現象に見られる統語的、意味的特徴に対して、その周辺的な現象をも考察対象に含めつつ、生成文法理論の観点から包括的な分析を試みたものである。具体的な分析対象は、コト節補文を選択する文タイプ(1a)、動詞連用形節補文を選択する複合述語文タイプ(1b)、イベント名詞句補部を選択する文タイプ(1c)である。

- (1) a. 太郎_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験すること]を忘れた。
b. 太郎_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験し]直した。
c. 太郎_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学の受験]を試みた。

生成文法の目的は、人間言語を生み出す心内メカニズムを解明することにある。コントロール現象の研究は、非顕在的な要素の統語的・意味的特徴を扱う点で心内メカニズムの解明につながると考えられており、繰り上げ現象と並んで生成文法の最も初期の段階から注目を集めてきた。主節の主語または目的語と補文の空主語との間の指示的同一性に関するコントロール現象は、英語を中心に分析が進められてきたため、節の定形・非定形といった統語的対立、さらにはそれと密接に関連する補文の時制の特徴が重視されてきた（Chomsky 1981 等）。そうした英語の分析方法は日本語のコントロール現象にも適用されることが多く、日本語でも補文時制に着目した分析が提案されてきた（Fujii 2006; Uchibori 2000 等）。

他方、コントロール現象には主文動詞の特性も関与しており、Stiebels (2007) の研究に代表されるように、通言語的に主文述語の意味的特徴がコントロールの成立に関わっていることが明らかにされている。しかし、主文動詞の意味という観点は従来の日本語のコントロール現象の分析では十分に考慮に入れられておらず、

意味とコントロール現象との間の関係が明確な形で捉えられてこなかった。こうした背景の下、本論文はコントロール現象に関与する述語の意味的特徴を明らかにするとともに、述語の意味情報と統語構造の対応関係を捉えることを目指したものである。

本論文の構成は以下の通りである。

まず第 1 章では、従来のコントロール現象に対する先行研究で得られた知見と残された問題を整理した上で、本論文の研究対象と目的が提示される。

第 2 章では、生成文法研究においてコントロール現象を分析する意義が、同形異義文である繰り上げ構文との対比に基づいて説明される。そして、変形文法時代の伝統的な分析方法からミニマリスト・プログラムでの最新の分析方法に至るまで、生成文法理論の枠組みに基づいたコントロール現象の分析方法が簡潔にまとめられる。さらに、コントロール現象が観察される日本語の構文において、従来の分析が適用可能な場合とそうでない場合が存在することが指摘される。

第 3 章では、コト節補文に焦点をあて、表面上同形でありながらコントロールと非コントロールで対立が見られる事実に対して主文動詞の意味に基づいて考察が加えられる。ここでは、主文動詞を Landau (2000) および Grano (2015) の提示する意味基準にしたがって分類することにより、「イベントの非分離性」「指示・操作性」「再帰性」といった語彙的な特徴がコントロール現象に関与していることが示される。続いて、こうした動詞の意味とコントロール性との対応関係の整理とともに、コト節における空主語の統語的実態に関して議論が展開される。具体的には、補文の空主語は照応的 *pro* であり、その解釈の決定方法は通常の照応詞と同様であることが論じられる。さらに、この照応的 *pro* の認可には上記の主文動詞の意味が関与していること、また照応的 *pro* を認可する述語は、Stiebels (2007)、Gamerschlag (2007) が主張する「本質的コントロール述語」にあたることも指摘される。

第 4 章では、統語的複合述語構文を対象に、そこに見られる長距離の受け身化のメカニズムがコントロール現象との関連で分析される。具体的には、統語的複合述語は全て単文性を備えていること、後項動詞が全て広義の意味でのアスペクト述語として捉えられることの 2 点が主張され、Cinque (1999) の機能的な主要部の階層に基づくと、長距離の受け身化が説明できることが示される。さらに、統語的複合述語に見られるコントロール性は、全て繰り上げ構造から導かれ、補文の空主語は移動の痕跡であるとの主張が展開される。

第 5 章では、イベント名詞句補部を選択する動詞について、コントロール性の観点から考察が行われる。具体的には、従来コントロール性が条件とされてきた項転移と数量詞遊離の 2 つの統語現象に対して、イベント名詞句の「前提性」(Diesing 1992) が追加条件としてはたらいっていることが明らかにされる。さらに、この前提性には、指示的表現が付加することによってイベント名詞句が前提的になる場合と、述語自体の意味によって前提的になる場合の 2 種類があることが指摘され、動詞の意味が項転移と数量詞遊離に関連していることが示される。また、これら 2 つの現象をイベント名詞句補部からの抜き出しと捉えると、それらがコントロール述語においてのみ可能となるのは、主節イベントと補部イベントがある種の依存関係をもつためであることが論じられる。

第 6 章では、コト節、動詞連用形節、イベント名詞句という複数の補部形式を選択できる動詞を対象に、補部形式と動詞の意味との対応関係について考察が行われる。特に、従来から種々の分析がなされてきた「忘れる」という動詞を取り上げ、「忘れる」が英語 *forget* の場合と同様に含意と叙実の 2 種類に分類できること、また付加詞の修飾関係はこの 2 分類から説明可能であることが示される。そして、含意の場合はコト節、動詞連用形節、イベント名詞句の全ての補部形式が選択できるのに対して、叙実の場合には動詞連用形節が選択できないことが指摘される。加えて、アスペクト動詞「始める」「続ける」や「慣れる」「飽きる」などの述語に

についても、そこに見られる意味と補部形式の対応関係が分析され、動詞の意味と補部形式の選択関係は、再構造化現象の観点から説明を与えることが可能であることが示される。

第7章では、本論文のまとめと今後の展望が提示される。

審 査 の 要 旨

1 批評

英語のように定形節・非定形節の区別が明確な言語では、コントロール現象は、繰り上げ現象の場合と同様に、主文動詞が非定形節（不定詞節）を補文として選択した場合に観察される。一方、日本語の場合、コントロール現象は主文動詞が時制辞のない非定形節（連用形節：[太郎_iは[Δ_{i/*j}筑波大学を受験し]直した])を選択する場合のみならず、時制辞を含む定形節（コト節：[太郎_iは[Δ_{i/*j}筑波大学を受験するコト]を忘れた])を選択した場合にも観察される。こうした日本語のコト節コントロール構文に対するこれまでの研究では、補文内に現れる時制辞は不完全指定の時制辞であり、不完全指定時制辞を含む補文節は英語の非定形節と同様の統語的性質をもっているため、コントロールが可能になるといった分析が提案されてきた。

そうした分析に対して、本論文では、定形節・非定形節という対立ではなく、主文動詞の意味を中核に据えてコントロール現象を説明しようとする新たなアプローチを提案している。この主文動詞の意味に基づくアプローチによって、日本語の補文タイプにまたがるコントロール性に体系的な説明を与えるとともに、これまでコントロール現象とは関連づけて論じられてこなかったイベント名詞句の解釈に対しても統一的な説明を与えることができるようになった点で、本研究は従来のコントロール現象の分析とは異なり、射程の広い研究となっている。さらに、コト節をコントロール性の有無で異なった節タイプに分けるのではなく、どちらも定形節とすることによって、時制辞の存在と顕在的主語の出現を関連づけると同時に、日本語の **pro** 脱落言語としての特性を組み込んだ分析を提案している点で、比較統語論の観点から見ても非常に興味深い研究となっている。

もちろん、コントロールに関わる現象は広範にわたるものであり、本論文の分析では扱えきれていない現象も残されてはいる。また理論的に見れば、本論文では厳密な構造化の議論が十分に行われていないといった課題もあろうかとは思われる。たとえば、5章で論じられている主節イベントと補文イベントの依存関係といった概念に対しては、さらに詳しい構造の検討が必要である。しかし、確かにそうした問題は残るものの、本論文の価値は、これまで関連づけて論じられてこなかった事実間の関係性の丁寧な記述とそれらを体系的にまとめ上げることのできる説明方法を提示することによって、記述と説明の双方に益する分析を具体的に提示している点にある。その点で、本論文はコントロール現象、さらには述語の補文選択の研究に対して記述・理論の両面から極めて大きな貢献をしているとすることができる。

2 最終試験

平成30年1月22日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格

を有するものと認める。